

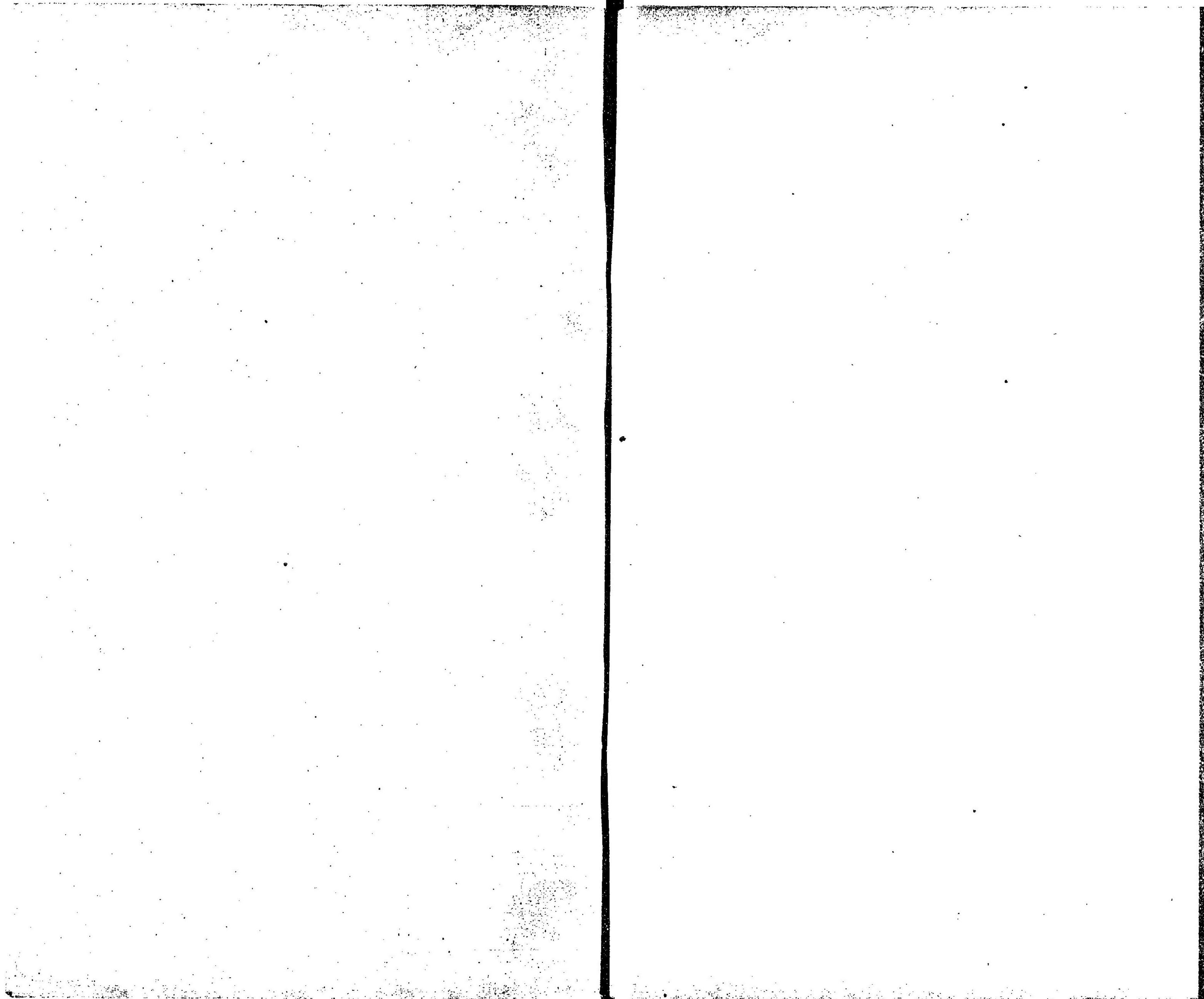
特44

86



265

109



法  
中  
傳  
音  
息  
緒

傳

明治  
43. 6. 27  
丙寅

己酉初夏

柳江題



義士の本懐

玉蘭作

こゝに播州赤穂の浪人

大石内藏助を始めと

義に勇みたる同志の面々

不俱戴天の君の仇

吉良上野介義央を

代ちて本懐遂げなると

艱苦に身をば償ふ

憂き年月を送りしが

天の依不優曇華の

花咲く秋ぞ来りける

時一丸元禄十五年

師芝中の四日の真夜中頃

浮世の人の子の刻を

計りて集ふ忠臣義士

精神は服装は打揃ふ

いろは句へる四十七

文字の符號に討入の

部署定め徐々々と

吉良が第宅へ押寄たり

折しも雪は霽渡り

月天心に影牙へて

隈なく照らす銀世界

被ぐ兜鍪や打物に

映る桂の花の色

果かと紛ふばかりにて

いと勇ましく見ゆだけり

斯く内藏助は表門に打廻り

是れ討入の下知すれば

逸雄いかに躊躇ふべき

豫て準備の長梯子

門の左方に打掛けて

第一番に片岡源吾右衛門

猿猴の如く走せ奪り

ヒラリと内に躍り入る

第二番には磯貝十郎左衛門

第三番に大高源吾

續てドツと飛入りたり

やがて大門の鑰奪ひ取り

サツト扉を打開けば

内藏助を先頭に

同志二十餘人押入り

跡をば棘と鎖したり

裏門に密に大石主税の同勢は

玄關前に來會すれば

一同聲を打揃へ

浅野内匠頭の遺臣

亡君の仇を報せん為め

唯今貴館に推参せり

峯を給へくと呼はりたり

原より大石内藏助は

山鹿流の達人なれば

懸れと打つや陣太鼓

しづけき天に鳴り渡る

響に應じ横川勘平夫高源吾

森にて玄關の敷子屋を撃破

難なき屋内に込入りたり

此時吉良の家臣新貝彌七郎

狼狽ながらも打ち出れば

堀部安兵衛渡り合ひ

唯一刀に薙ぎ倒す

續て出る左右田源八

喚きかけれる鋭鋒を

不破數右衛門受け流し

返す力に車切にぞなかりける

是より敵味方も亂れ

火花を散らり闘へど

いかに義士にぞ敵すべき

皆悉く伐れしお

尚ほ書院の隅に蠶く入影

不思議の者と引出せば

足腰抜け茶坊主なり

爾生命の惜しからば

主人の寢所を業内せよと

言われて茶坊主一議なく

膝行ながらに指示せり

いぞやとばかり押入るた

夜の衾は其儘ながら

まはいつし不空蟬の

蛻の殻に氣勢ル脱け

寐壽に双手を差入るれば

寢肌の微暖猶ほ残り

遠くは去らざいぞ詮義と

納戸の隅ぐ長局

隈なく探し索むれ共

目指す怨敵の影もな

嘻口惜しや如何にせん

年月肺肝を打碎き

千辛萬苦を竭しに



此期に臨み甲斐もなき

本懐遂げずもあるならば

死すともいふて瞑目せざと

切齒なしてぞ居たりける

か方所に大石内藏助業り

各方は何進猶豫あるぞ

豫て勝負は明の迄と定めり

いまだ時刻に間あるべし

疾く敵を獲られよと

烈しき下知に鼓舞され

復た八方に立ち向ふ

折れこそあれ雑部屋た

樂に物音聞ゆるにぞ

板戸をハタと蹴破れば

内より切炭磁器を

投げ懸く二人の武士

方振翳し突き出づるを

茅野和助大石瀬左衛門

得たりと兩人に斬り結べり

此時間重次郎は

十文字の鎗打ち扱き

潜み残れる一入に突懸れば

武林唯七飛んで入り

髪掴み擲げ出うたり

如何なる者かと孰視れば

下には白無垢上に綾

きらめく小袖吉良殿か

それがあらぬか怪しやと

生擒者に訊問せば

紛ふ方なき少將殿と

聞きていらつれも悦び勇み

尚も肩の邊を開き視るに

去年七巻の斬付け給ひ

太刀創の痕歴然たり

斯くは最早疑ひなきと

相圖の號笛吹き鳴らせば

一同此所に寄り集へり

左れば内藏助は吉良殿に打對ひ

只管切腹を勸むれども

返辭も得せぬ焦躁きた

短氣の唯七堪り得ず

皆様御免候へと

吉良の肩先切下げたり

重次郎は唯七を突除けつ

粗忽の舉動致さねまど

一番鎗は拙者にて候ぞと

すゞに諺はんとせしが

内藏助の指圖に依り

重次郎は上野介の止めを刺

唯七は首を三つは上げたけり

折れぬ明るゝのゝめに

ぬぐりはなるゝ小雀の

聲も忠義をことほぎて

明け六ツ時や六ツの花

踏みだきつゝ悠然と

無縁寺指してぞ引揚げる

明治四十三年六月十日印刷

全 四十三年六月二十五日發行

編發  
輯行人兼

有  
村  
彌  
四  
郎

大阪市東區和泉町二丁目一番地

印刷人

藤  
井  
護  
三  
郎

大阪市東區和泉町二丁目一番地

電話東四五九番

發行所兼

藤  
井  
改  
進  
堂

大阪市東區和泉町二丁目一番地

長電話東二七〇番

265  
109

